



TITLE:

# 技術と進歩の像の消滅：マスク・ピカートの観相学に拠る断章

AUTHOR(S):

佐野, 利勝

---

CITATION:

佐野, 利勝. 技術と進歩の像の消滅：マスク・ピカートの観相学に拠る断章. ドイツ文学研究 1969, 17: 90-105

ISSUE DATE:

1969-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184936>

RIGHT:

## 技術の進歩と像の消滅

——マクス・ピカートの觀相學に拠る斷章——

佐　野　利　勝

## I

数年前のことであるが、或る画家から現代美術の展覽會への招待券を贈られた。それを受け取ったからには、礼儀上も見に行かねばならない。ところが第一室へ足をふみ入れた途端、当惑して立ちすくんでしまった。キャンパスいっぱい塗つけられた奇怪な色、そのうえを走る正規則な線や渦、壁に叩きつけられた赤インクのうな汚点。どれもこれも、この調子なのである。

私はしばらくこれらの絵を見ようと努めた。独自性と新しさを追求していることは、どうやらわかる。が、新奇さを追い求めることによって、どれもこれも似たりよったりのものになってしまっている。むしろ、これらの絵は人間が描いたものではなく、絵具が勝手に戯れて、戯れながらキャンパスをよごしたもののようにもみえる。たしかにこれは絵というようなものではない。やがて、不安を覚え、眼も痛くなって来たので、絵から眼をそらして他の觀客の方を見ると、彼らも同様なのであろう、眼をつぶっているひとが何人もいた。人間はどうし

て、これほどまでに像をなくしたのであるうか。あるいは、われわれはついに像から見捨てられてしまっているのであらうか。

その後、ある会社へ友人を訪ねた。正面玄関に、何を表現しているのか分らぬ、あの種類の現代彫刻が置いてある。それが不思議にあたりの雰囲気になつちしているのである。やがて応接室に案内された。そこにも、あの形をなさない抽象絵画が壁にかけられていて、それが、この会社内の忙しく動いている空氣のなかでは異和感を覚えさせない。はじめのうちは、そのことが不思議に思われたが、私はふと想像してみた、……ここに、日本のものでもよい、西洋のものでもよい、どれか名画をかけたとしたらどうだろう。想像しただけで、もういけない。名画は強い存在力をもって、あたりを庄するだろう。そして、その周囲に静寂を創り出すことだろう。ひとびとは急速にうごきまわることもできず、受話器にむかつて、早口に、声高に叫ぶこともできまい。この壁にかけるとは、なるほどこのような近代絵画が好都合である。だとすれば事柄は重大である。絵画だけではなく、われわれ現代人の内的・外的生活から像は消失してしまっているのだ。現代絵画は現代世界のこのような状態を種にして策動し、形をなさないこの状況を誇示しつつ、更に像の消滅を推進しようとしているもののようにみえる。いろいろと説明されてはいるが、誰が何といつても、これはもはや芸術ではない。

## II

造化の創り出したものはすべて像をなしており、そして美しい。山、川、森、植物、動物、そして人間……被

造物はみな像として存在している。そして事物や人間の像によって、われわれはそれらの存在と精神的交流を保っているのである。いや、それだけではない。事物と人間とは像によって守られているのだ。事物の像を破壊してみるがいい。もろもろの事物は形をなさない裸の物質となって互いに融合し、巨大な堆積となって人間に襲いかかるだろう。崇高な人間像を打破してみるがいい。人間はむきだしの生命体となり、その盲目的なヴァイタリティーが暴走しはじめだろう。セックスの氾濫と暴力行為の横行は、そこに起因している。

### III

世界が像を失いはじめたのは、ヨーロッパではほぼ百五十年前からだと言われている。日本では七、八十年前からであろう。そして、この傾向は戦後に特に著しい。何故であろうか。最大の原因は技術の進歩ではあるまいか。あるいは像を失った人間が、技術のまっしぐらな進歩を可能にしたのかも知れない。断定的に原因を挙げることは避けたいが、技術の進歩と像の喪失とは並行して進行している。われわれは技術の推進に狂奔しながら、大切なもの、とりもなおさず像を打ち砕きつづけているのである。

海岸の埋立地に立つ製鉄工場……それは周囲の自然を制圧し、勝鬨をあげながら更に広大な自然の征服へと発進しようとしている巨大な戦艦のようだ。あたりはすでに戦場のように荒廃し、眼と心を楽しませるものは何も無い。公害は空気や水の汚染だけではないのである。像の破壊からくる精神的公害の方が深刻ではないのか。あるいは、自然の美、自然の像に対して敬意を払うこともできないほど、人間の心は荒んでしまったのであろうか。

#### IV

人間は太古から技術的存在であった。ものを造るという行為が、人間を他の生物から際立たせる一要素であった。しかし、同時に人間は太古から芸術家であった。石斧や土器や土偶を見ていただきたい。これらは太古のひとにとり必需品であつて、いわゆる美術品ではない。それでも美しく力強い像をもっている。人間は技術を駆使しながら、常に像とともに生きて来たのである。そして、そのことによって、人間はみずからも像として存在することができた。事物の像によって、人間も支えられていたのだ。だから、人間と人間だけではなく、人間と事物とのあいだにも心のつながりが成立していたのである。

現代技術の産物、例えば自動車や飛行機、それに大量生産されて提供される日用品も像をもっているではないか。そして、それらも時として美しいではないか、と言うひともあるかも知れない。が、残念ながら、そうではない。発達した機械によって製造されるそれらの事物は、何時でも取り換えがきくのである。半年乃至一年すれば、何の未練もなく新しい自動車に乗り換えるひとびとが多いのは、心のつながりのない証拠である。発達した工業製品は眞の像の特性を持たないのである。

像なるものの特性とは何であろうか。他でもない、像には合理性や目的性でもってしては説明しきれない余分のものが宿されている。

例えば山の成立の歴史や構造は、地質学が教えてくれるが、威厳をそなえてわれわれを見おろす山の姿、山の

像を説明するものはない。そびえ立つ老樹や、路傍の可憐な草花に関して、植物学がある。その成分を化学的に解明することも困難ではあるまい。しかし、それらの学問は、樹木や草花の像を説明することはできない。人間の像に関しても同様である。眼はなるほどのものを見る。が、単に見るための器官ではなく、眼はまた与えるのである。そのような、慈愛や慰めや激励、時には怒りや悲しみを与える眼の前では、われわれは驚いて立ちどまり、沈黙し、そして自己を変えることさえ起こってくる。それほど力を眼はもっているのである。真の像は常にこのような説明不可能な驚異性を背景としている。真の像の前に立つとき、われわれはその像を見て、それを知ると同時に、背景にあって像を生み出し、像を支えているものを予感するのである。この究明しつくされ得ないものを、スイスの観相家マクス・ピカートは「より以上のもの」(das Mehr)とよんでいる。「像は陳述し、報告しながら、同時に<sup>△</sup>より以上のもの<sup>▽</sup>、それが報告するところのものより以上の何物かに向って沈黙する。」だからわれわれは、像に応えるためには沈黙と予感とをもってする他はない。ただ、それ自身も像である詩人の言葉か、あるいは美術の作品だけが像に呼応することができる。北斎はあくことなく富士山の絵を描きつづけたのである。

## V

人間は本来、技術者であると同時に芸術家であった。古来の手工芸品を想いうかべていたきたい。それらは像をなしてをり、像として存在していて、そこには実用性を超えた美、あの「より以上のもの」がある。意図せ

ずして美をうみ出すほど、かつての工人たちは強い存在性をそなえていたのであるうか。職人はまず、木や石や陶土などの材料を熱心に吟味する。彼は自然から受けとった素材を生かさねばならない。ここにすでに自然との協同があり、彼の作るものには自然がはいり込んでいる。さて、彼は道具を用いて作業をすすめるが、この作業過程は彼の、つまり職人自身のものであって、従って彼の生活のリズムに乗って行なわれる。生活のリズムは、とりもなおさず生きた時間だ。手工業のなかでは時間は生きている。（彼は朝はやく起きて仕事場に入り、こつこつと働く。時には煙草をすって一服する。昼飯を食べる。お内儀さんと口論して、道具をほうり出すこともあるだろう。）手工品はこの生きた時間のなかで造られるのである。そしてその時間が、作品の像のなかに保存される。手工品が機械製品とちがって温か味を帯びており、親しみを覚えさせるのはそのためであろう。だから古い時代の何気ない日用品が、われわれをひきつけるのである。職人は全工程を掌握しているのであるから、彼の性格や折々の気分の変化が作品にあらわれるのは必然のことであった。無名の職人の責任感と矜持とはそこから生れる。しかしまた、彼がどれほど熟練していても、その製作過程のなかに偶然が作用し、失敗することもある。予期以上の成功をおさめることもある。職人が謙遜なのはそのためでもあるうか。それにしても、名も無い昔の工人たちが作った日常の器物が、現代の工芸の大家の作品よりも見事で美しいのは不思議といはねばなるまい。

以前には、われわれはそのような手工品に取りこまれ、それらの像と共に暮らしていた。それらの器物を粗末にう扱ことは許されない。「もったいない」というのがわれわれの実感であった。像として存在しているものは美しいのである。そして、美は像からの人間への呼び掛けである。われわれは像の前に立ちどまり、じっとそれを眺める。そして対象に時間を与える。それが愛なのだ。「像と愛とは相い依って一体をなす。だから像を喪失

した世界は、愛なき世界なのだ。」（ピカート）

製品だけではなく、職人の使用する道具も手工品であり、それに道具は元来、人間の手の延長のようなものである。だから使えば使うほど手に馴染むのだ。道具には機械のように人間に抵抗する冷たさはなく、人間に向けられた親しみがある。そして、往々、博物館に陳列されても不思議でないような、美しい形を持っている。職人は道具を極度に大切にする。そこには人間と物（道具）との親密な呼応関係があった。

## VI

技術が進歩して機械がますます自律性を獲得すると、技術と像とのバランスは失われ、技術は一方的に驀進し、像は急速に消滅するにいたった。

機械は目的にあわせて計算されており、その計算が厳密であればあるほど、うまく機能する。そこには、像もっているあの「より以上のもの」、解明しつくされないものの入り込む余地はない。いや、そのような不合理なものを締め出すことによって機械たり得ているのである。だからあらゆる機械は拒絶的なのだ。

像は一つの統一体をなしていて求心的である。そして見る者をこの統一のなかへ迎え入れる。それが像を眺める者の幸福である。ところが機械は統一体をなしておらず、遠心的である。われわれは機械をばらばらにして、また組み立てることができる。そしてその際、新しい機構を組み入れたり、他の機械と接続したりしてもよい。そのようにして機械はますます膨張してゆく。これが機械の不気味さである。



機械は均一な運動を何時までも繰り返す。その運動のなかで、機械は生きた時間を磨き殺しつづけるのである。何故といって、機械の運動は完全に均等に、同一の速さをもって経過する抽象的時間のなかで行なわれるのである。だから、今日の二十四時間と明日の二十四時間とは全く同一のものでなければならぬ。生きた時間、人間の時間はそうではなく、時間は人間において歴史の姿をとって現われる。だから昨日の二十四時間と今日の二十四時間とは同一のものではなく、一度過ぎ去った青春は二度と帰ってくることはない。そして像はこのような時間のなかでゆっくりと形成されるのである。機械の急速で、しかも単調な運動を見るとき、われわれはそこに時間が殺され、像が破壊されているのを感じる。機械に対面したときの不安と、機械のそばで働くひとびとの退屈とは、そこから生ずるのだ。

## VII

機械製品も同様である。機械は製品の材質を顧慮しない。材料は、手工業の場合とことなり、あらかじめ均一に造られている。形もすべて等しい。それらの背後には「より以上のもの」はなく、一つの製品のうしろには同じ製品がつづいて出てくるだけである。すべては明白であって、説明され得る。機械製品は文字通り御覧の通りのものである。そして、何時なんどきでも取り換えがきくのだ。

インダストリアル・デザインは機械製品に宿命的なこのような欠陥を補おうと努めているが、その根本的性格を変えることは出来ない。機械や機械製品と人間との心の交流は困難なのだ。何故なら、心の交流、感応の関係

は、像と像、いや、像の背後にある不可視的なものによって成り立つのだからである。

技術時代のなかでは、人間はやがて像を失い、みずから技術化してゆく。像は近代的技術にとっては異質的なのである。そして異質的なものは排除されねばならない。本来、世界は合理性のうえに成立するのではなく、説明しきれない「より以上のもの」、過剰性のうえに築かれている。そうでなければ、なぜ花はあのように美しく、山はあのように荘嚴なのか。そして真の人間像はどうしてあのように崇高で、力強いであろうか。この「より以上のもの」が駆逐されれば、人間世界の場合は一変せずにはおれない。

## VIII

像によって守られることのない人間は孤独である。孤独な人間は集団化をもとめる。しかし、孤独が寄り集まれば、より大きい孤独が発生するだけだ。集団のなかにあつて、人間は一層孤独なのである。

国家や、会社、官庁、そして学校など、もろもろの社会的機構も合理化されて像を失い、機械化された。ブルーカラーからホワイトカラーを登用する道をひらき、成功している会社があるという。しかし、今日ではすべてのひとびとがブルーカラーではないか。朝のラッシュ時に勤務地へと急ぐひとびとの顔は、仕事にさきだつてすでに疲れており、楽しみがないのである。大学は学生たちを人格的に形成するのではなく、技術的に成形して社会へ送り出す工場のようなものにちかづき、学生たちは必要な知識をもっぱら受動的に受け取って、単位を認定されることのみをもとめる傾向が強まりつつある。ここでは、近頃声高に叫ばれている「対話」は成立するはず

がない。心の交流のための基盤がないからだ。ひとびとは、ただ力学的に右往左往するだけである。心の交流がなく、単に力学的にうごきまわる人間、……だから彼はまた恐ろしく残忍であり得る。

近代技術の進歩、像の喪失、愛なき世界、大衆の発生、慢性的な道德の低落。それはすべて相い連関する現象である。

## IX

像の喪失によって生ずる窮乏化と道德的低落の例をあげよう。

突然、降って湧いたように発生する団地の高層住宅、……それはかろうじて住宅たり得るように、ぎりぎりの線で計算され、そして画一化されている。そのなかのあらゆる空間は、最低限の必要を充たすために利用しつつされている。これが果して人間の住宅であろうか。そこには過剰性、「それ以上のもの」がないのである。だからわれわれは団地住宅のなかでは安らぎを感じることができない。このような住宅のなかでは眠りも変形されて、労働力の再生産へと転落している。商品の洪水のなかで、ひとびとは品物を買ひあさる。しかし機械製品にはもともと豊かさがなく、人間との心の交流がない。絶え間なく大量生産される物質のなかにあって、われわれは常に窮乏感を抱きつづけるのである。

大量養鶏のために、一羽の鶏がかろうじてはいることのできる籠をおびただしく積み重ね、餌の投与と集卵を自動化した人間は、みずからも狭小な巣箱につめ込まれ、何層にも高く積み重ねられているのである。そして交

通機関のベルトコンベヤーで、労働へと送り出される。

片田舎の民家はそうではない。民家は一つの像をなしていて、周囲の自然と有機的につながっている。小さくてもよい。自己の存在を誇示することなく、内気なたたずまいをしているにもかかわらず、豊かなのである。われわれはそのなかに生まれ、そのなかで死ぬことができる。

しかし、万事が浮びあがったかと思えばまた消えてゆく、この遽しい現代のうごきのなかにあって、少数ではあっても、真に優れた建築物が造り出されている。今日、建築は像と共存し得るほとんど唯一の技術である。建造物は機械的に量産されるものではなく、一回限りのものであって、その本質上、短期間の存在と急速な消滅ではなく、永続を目指すものであり、それはまた像の性質に近いからであろう。いずれにせよ、真に優れた建築物が存在するということは、われわれにとってひとつの慰めである。

休日になると群をなして自然のなかへ出掛ける青年たちが多い。日曜日の京都とその周辺は、それらの青年たちでいっぱいである。彼らは熱心に自然や古文化財をもとめているようにみえるが、実は、そうではない。

しばらく前、四十人近くの若いひとびとのグループに誘われて、山里の古寺に一泊したことがあった。日が暮れてからお寺に到着したが、長い参道には電燈もなく、両側に亭々たる杉がそびえ、夜を一層暗くしていた。あたりは静まりかえり、聞えるのは青年たちの元気なざわめきだけであって、ところが、この古寺にたどりつき、夕食をおえるや否や、一群は階下のテレビにしがみつき、一群は酒を飲んで高歌放吟しはじめた。また別の一群は麻雀とトランプに没頭した。彼らは何のために、態々ここまで来たのであろうか。周囲の自然と彼らの存在と

は、まるで異質的なのである。現代の若いひとびとは、これほどまでに自然への感応を忘れていたのである。技術時代の特徴をもっとも明瞭に具えた彼らは、大挙して自然のなかへはいってゆき、そして自然を攪乱するのである。自然との心の交流を忘れたこれらの若人たちは、従ってまた人間同志の心の交流を忘れてしまったらしい。彼らの意識はばらばらであった。いや、すでに自己自身のなかでもばらばらなのである。友人達への迷惑を顧みることもなく、徹夜で麻雀に耽る者も少くなかった。像なき世界は、また愛なき世界である。いや、彼らは愛なき世界のなかで像を失った最大の被害者なのだ。

像の喪失と人間の内的解体は、当然その外観にも現われずにはおかぬ。

「内的アトム化が人間の姿にもあらわれるのは避けがたいことである。内的アトム化は人間の容姿に侵入するのである。私が復活祭後の月曜日に三時間ばかり国道を歩いていった時のことであるが、自動車やオートバイがひっきりなしに私を追いかけていった。そのとき私は驚いた。……それはもはや、オートバイを引き出し、さてそれに跨って走っている人間ではなかった。いや、それは人間とオートバイとの奇妙な統一、現代の怪物であった。背後にかくれているのは馬の胴体ではなく機械の胴体である。それに人間の座席が癒着しているのだ。」  
(ピカート)

現代の怪物となった人間は、ことさらにけたたましいエンジンの爆音をたてて夜の国道を疾走する。機械化された人間には機械の音が是非とも必要なのであるか。彼らは夜を驚かせ、ひとびとの眠りを妨げる。このような人間に交通安全を呼び掛けてみても、何にならう。

ばらばらになった世界のなかにいるばらばらの人間たち、……これは独裁者にとって好都合の状況である。何

故なら、そこでは万事を、そして人間たちを技術的、外面的に寄せあつめて、機能させればよいのだからである。ここではまた人間を見さかいなく殺すことも可能である。独裁者の出現と原爆の投下は、この時代に照応している。

実際、驚ろくべき道德の頽廃ではないか。

## X

では、この押し止むべくもない巨大な潮流のなかであつて、われわれは何をなすべきであろうか、また、何をなし得るであろうか。

「今日に生きる人間の使命、……それは、むきつけに自分の眼前にあるアトム化の潮流に對面し、全きものとしての自己の像を明確にすることに他ならない。」（ピカート）

われわれ凡人にはそれは容易なことではない。しかし、この破壊と解体の潮流のなかで、自己の像を明確にしている少数のひとびとは確かにいる。そして、明確な像からは強い治癒力が放射しているのである。

たぶん父親がいくらか命令的にすぎたためであろう、ひねくれて反抗的になった生徒がいた。彼は学校でも恐ろしく反抗的で、日頃、先生を嘆かせていた。ところが夏の休暇に、あまり裕福でもない両親から旅費をねだり取って、ひとりぼっちで登山に出掛け、霧に迷って遭難したのである。両親は現場に急行した。もう絶望的と思われたとき、幸運にも彼は地元の救援隊によって救出された。息子の顔を見たとき、母親は彼の名前をひと声さ

けんで、その場にくずおれてしまった。父親は自制しながらも、喜びと安堵の情をうかべて、じっと彼を見つめていた。息子も、父の心配と疲労にやつれた顔をじっと見た。はじめしばらくはまだ不信の表情をしていたが、やがて「すみません」とだけ言って、彼はさめざめと涙を流した。このようなことがあって以来、彼は今までとは別人のような生徒になった。

そこに立っていたのは彼の父であった。しかし、命令的な単なる彼の父親であるだけではなかった。一家を支援指導するものとしての父の像がそこに明確になっていたのである。だから彼の父を超えて、普遍的に父なるものがその背景に立っていた。また、そこには彼の母がいた。しかし、単なるひとりの母としてより以上に、子供を生み育て、子供のために配慮していくくむ客観的普遍的に母性的なるものの像が、そこには明瞭になっていたのである。さらに、そこには地元のひとびとの献身の姿があった。この像の前で息子は転生したのである。

像は利用価値なきもので、ただ存在するだけである。現代世界の激しい運動のなかでは無用の長物であり、邪魔ものである。だから現代人は像を締め出し破壊しようとする。それでも像を破壊しつくすことは、人間には出来ない。そして存在力を有する明確な像は、その基盤をなす「より以上のもの」から今なお根源的なものを汲み与えるのである。

これはあまりにも主観に偏した視点からの観察だ、と言うひともあることだろう。しかし、いわゆる客観に偏して合理性の観点からのみものを見るのが果して真の客観的考察であろうか。人間の心を締め出すことによって生じた不幸は、今ではあまりにも歴然たる事実ではあるまいか。

しばらく以前にある新聞社が多数の学生たちの意識調査を実施した。そのなかで、「大学教官をどう思うか？」

というアンケートに対し、「学問上の先輩だと思う」という答えに並んで「ティーチングマシンだ」と答えた者が相当数にのぼっていた。像破壊的な合理性は教師をサラリーマンに、労働者に、そしてティーチングマシンにしてみよう。また学生の意識を変えて、教師をそのようにしか見えないようにしてしまうのである。教師がティーチングマシンなら、医者はさしづめ医療機械であろう。しかし……

「教師は、単に生徒よりも知識のある者というだけではなく、あらゆる授業を超えて先生なる者——具体的に授業をはじめの以前に、すでにその人から教えが発散する一人のひと——として存在していなければならない。ちょうど真の医者のようなものだ。真の医者は、彼が病室へ入ってくれば、患者を診察したり薬の処方を書いたりする以前に、すでに彼の身体から治療が放射しているのである。このように、真の医者からは原初的に治療が放射しているように、先生からは、彼が教室の扉をあけた時にすでに、教えが放射していなければならない。」

(ピカート)

われわれは再び像を尊重することを学ばねばならない。利用価値なき像、……しかし、人間にとり最も大切な根源的なもの、愛、沈黙、誠意、敬虔などは、すべて用うるにすべなき無用のものではないか。それらはただ存在する、そして存在することによって作用するのである。われわれは像の前に立ち止らねばならぬ。たとえ破壊された像の残片であっても、それは像の断片なのだ。像を通じて他の諸々の根源的なものとの連関を恢復することも可能となるかも知れない。自己の像を全きものとして明確にすることはとても不可能であろうが、少くともわれわれは根源的な像にあやかり、そこに連関づけられることは可能なのだ。その時われわれは、機械的な



ものとは異質のものとして存在することが出来る。そうなれば人間と機械の關係は正常化され、機械が人間を支配することを止めるであろう。そしてわれわれは現代のケンタウロスの姿を脱し、ふたたび機械を操縦する人間、の姿にもどることが出来る。そしてもうもの社会的機構も、機械的、非人格的であることをやめねばなるまい。いや、未来へ流し目をおくことにより、この現代を逃避しようとしてはならぬ。現代世界のなかにはたっている破壊の、アトム化の力はあまりに強いのである。われわれが確保しようとする像もろともに、アトム化の流れはわれわれを引きさらってゆく。しかし、造物主は像を創り出すことを止めない。そしてまた、アトム化の急流のなかでありながら、磐石のように強い存在力を維持しているひとびとも現にいる。科学技術の渦の中心にあつて、そこなわれぬ人間像を保持している学者がいる。技術の悪魔性をもっともよく知っているゆえに、真剣に悩み、その超克につとめている技術者もいる。そして、悩みも根源的事象の一つであつて、根源的なものに特有の力をもっているのである。

これが現代に生きるわれわれに対する慰めであり、そして激励なのだ。